

福島で生きるといふこととは？ 県内外で増える防護・啓蒙活動

原発事故後、福島県内では放射能に関する情報が日常的に溢れるようになった。地元紙には毎日、一面を割いて、野菜の検査の情報が載る。夕方のテレビニュースでは天気予報の後に最新の空間線量の情報が出る（110ページ右上写真）。放射能が日常の身近な存在に好まぬながらもなってしまうている。

県外への避難を選択した人もいれば、自分の中でリスクとの折り



個人線量計は小学生用、妊婦用、未就学児用の3種類。ガイガーカウンターも貸し出している

合いをつけて残る選択をした人もいる。どちらにしても、突然迫られた難しい選択である。

白らが置かれた環境を正確に把握し、自分は何を選択するのか。その選択を助けるためのさまざまな取り組みが県内で始まっている。

住民1人1人の被ばく量を モニターし防護につなぐ

樹齢1000年の滝楼で有名な福島県三春町。福島第一原発から約47キロ、郡山市に隣接する人口1万7000人の小さな町だ。この町が立ち上げた「実生」プロジェクトが注目を集めている。

このプロジェクトでは町内の全小中学生の80%に相当する1400人に、個人線量計（上写真）を配布している。他の多くの自治体では、線量計は通常2〜3カ月携帯すると返却、データを受け取って終わりだが、三春町の場合、一度配った線量計は高校生まで持ち続けることができる。

町役場が持つ線量計の計測結果を読み出す機械で、積算線量を定期的に打ち出し、学校を通じて本

人・家族と共有する。また、線量計を役場に持参すればいつでも計測結果が入手できる。

数値の結果や、線量が高い生徒や保護者への説明は、学校経由で教員が行う。実際に、他の生徒よりも高めの線量の結果が出た生徒について、自宅の線量を測り、線量の高い部屋にいる時間を短くしたり、家の周りの除染を行うなどして、改善につながった例もある。

就学前の児童や妊婦も、同様に線量計を借りることができ

約10年の長期間連続でデータを蓄積するというシステムは、他に類を見ない。

数値の読み出し機や測定結果は町が管理し、町内の放射線に関するのデータベースを構築する。データ解析は東北大学の理学研究科が行い、外側から支援する。

プロジェクトを立ち上げたのは、町の住民で、芥川賞作家で僧侶の玄術宗久氏。震災直後にテレビ出演していた氏の番組をたまたま見ていた、東北大学の小池武志助教が、「何かできることはないか」と玄術氏に協力を申し出



福島県民と各分野の専門家が、車座で福島に暮らすことの現状を話し合った

て始まった。町内の放射線や個人の被ばく量をきめ細かく測り、現在の放射性物質の拡散状態を把握することで、原発事故後もここで暮らしていくための、判断のよりどころにすること。この考え方に町が全面賛同し、町と町民、外部の放射線測定専門家三者が組み、プロジェクトはスタートした。

「放射能の存在から目をそらさず、その現状を細かく正確にデータとして計測し、町民に情報として提供する。それをもって各自に判断してもらおうかと思う」と志賀清昭・三春町総務課主幹は話す。

「このプロジェクトは住民が自ら自分の環境を測定して把握しようというもの。われわれ専門家はあくまで求められれば外から支援するのみ」と小池助教教授は言う。

同様に「住民発」で自分の環境の測定や把握をしながら、今後ここで暮らしていくために何をすべきかを考える動きが、いくつか出てきている。

「付き合っていた人とがれきのことでけんかして疎遠になってしまった」「除染に使えるという触れ込みの怪しい菌を信奉し、広めようとしている町内の実力者がいて、困っている」

7月15、16日に、福島市内と郡山市内で開かれた「ガイガーカウンターミーティング」。ガイガーカウンター（線量計）の使い方の

講習会や、放射線の専門家、生産者、小売企業などの参加者のパネルディスカッションと併せて、各専門家が福島県民と車座になり、日常生活を福島で送ることに對しての、生の意見が交わされた（右ページ下写真）。警戒区域から避難している友人の話になると、言葉が詰まらせる参加者もいた。

一方、福島の現状を外に伝える動きも活発化している。

私 は双葉町出身です。実家も小学校も、すべて警戒区域内にあります。こんな話を飄々と語る前門上でスタートする放射線勉強会が各地で活況を早めている。町民の全員が避難している警戒区域である双葉町出身で福島ステークホルダー調整協議会事務局長の半谷謙己さ

んを講師に招いた、家族のリスクマネジメント勉強会である。この半年で東京、京都、名古屋などで計17回の勉強会を開いた。専門知識が一切なくてもわかる、のがコンセプト。食品中の化学物質の話や、過去の大気圏核実験時代に無意識にしてきた被ばくの話、福島県内の食品の現状についての話では、どの品目をどう食べるかについてまで詳しく具体的な話が出る。

子供連れの主婦が大半を占める参加者にも「身の回りにはいるいろなりスクがあること、あらためてその種類の多さに気付きました」などと、好評を得ている。



「いつか双葉に帰るつもりです」と話す半谷さん。伊達市の専任放射線アドバイザーも務める

「でも、いつか双葉に帰ろうと考えています。小さな日本で争うことに、意味はない。福島を助けてください」。半谷さんはこんな言葉で話を締めくくった。